

アリエル

二〇〇四年夏号

発行人 井田 泉

〒六〇三―八一六四 京都市北区紫野東御所田町一七

Tel 〇七五(四五二) 二二八七 Fax (四一五) 七五五八

イザヤ——聖なる神との出会い

これは昨年十月十日、京都伝道区信徒伝道協議会主催の秋のキリスト教講座「預言者のこえに聴く——まことの平和を求めて」の第一回として語ったものです。

一 イザヤの時代



新約聖書には旧約聖書の言葉がたくさん引用されています。その数は二〇〇近く、細かく数えれば数百に達するかもしれません。新約聖書の中で最初に旧約聖書が引用されているのはどこか。それは、マタイ福音書第一章です。マリアとの婚約を解消しようかと悩んでいたヨセフの夢の中に天使が現れて言います。

「『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男

の子を産む。その子をイエスと名付けな

さい。この子は自分の民を罪から救うからである。』このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであつた。『見よ、おとめが身ごもつて男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』その名は、『神は我々と共におられる』という意味である。』マタイ一・二〇―二三

天使が語ったその預言者、救い主の誕生を告げた預言者とはだれか。それはイザヤです。旧約聖書・イザヤ書にこう書いてあります。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもつて、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」七・一四

イザヤは、主イエスよりも七〇〇年あまり前、紀元前八世紀にユダ王国で活動した

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」

イザヤ六・三

人です。イザヤとは「ヤハウェの救い」の意味で、「ヤ」は「ヤハウェ」（神の固有名詞）の略された形、「ハレルヤ」（ヤハウェをほめたたえよ）の「ヤ」と同じです。紀元前八世紀のユダ王国とはどのような時代であつたか。イザヤ書の中から聞いてみましょう。

「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られる。わたしは子らを育てて大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。牛は飼い主を知り、ろばは主人の飼う葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、わたしの民は見分けない。災いだ、罪を犯す国、咎^{とが}の重い民、悪を行う者の子孫、墮落した子らは。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けた。」一・二―四

「支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。

孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない。」一・二三

「主は裁きに臨まれる、民の長老、支配者らに対して。『お前たちはわたしのぶどう畑を食い尽くし、貧しい者から奪って家を満たした。何故、お前たちはわたしの民を打ち砕き、貧しい者の顔を白くひきつぶしたのか』と、主なる万軍の神は言われる。」三・一四

親を失った子ども、夫を失った女性、貧しい人々——その人々を力を持つ者たち、富を持つ者たちが奪い、苦しめ、打ち砕いている、ということです。

「民は自分たちを打った方に立ち帰らず、万軍の主を求めようとしなかった。それゆえ主は、イスラエルから頭も尾も、しゆるの枝も葦の茎も一日のうちに断たれた。長老や尊敬される者、これが頭、偽りを教える者、預言者、これが尾だ。この民を導くべき者は、迷わす者となり、導かれる者は、惑わされる者となった。」九・一三—一五

人々は神を捨て、背を向けた。そういう時代にこそ指導者の責任は重いのですが、

その指導者たち自身が墮落している。神の言葉を告げるべき預言者が偽りを教えている。これが当時の神の民イスラエルの現実でした。

二 「聖なる、聖なる、聖なる万軍の神」——召命

そのような時代に、エルサレムに一人の若者がいました。国と社会の現状を憂い、その現実には悲しみと憤りを持っていました。彼は祈り、また自分がすべきだと思うことに力を傾けました。しかし一人の青年に何ができるでしょう。この国と人の現実を何とかしなければという切迫した思いと、何もできないという無力感の中に彼は苦しんでいました。悲観と絶望に陥ってどうすることもできませんでした。

ある日、この若者イザヤはエルサレムの神殿で祈っていました。祈っているうちに今まで経験したことのない空気を感じました。神が自分の前におられる。神殿いっぱい、神の衣の裾が広がっている。彼は天使が神の前を飛び翔けるのを見ました。セ

ラフイムです。それぞれ六つの翼を持って飛び交っています。セラフイムは互いに呼び交わして唱えています。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」六・三

聖餐式の後半、感謝聖別の祈りで私たちが唱える言葉はここから来ています。

天使セラフイムの呼び交わす声は響きわたり、その声によって神殿の入り口の敷居が揺れ動きました。神殿は煙に満たされました。

イザヤは神を見た。聖なる神に触れました。そのとき彼は「自分は死ぬ」と感じました。これまで彼はこの国と民族の墮落を嘆き、社会と人の悪に憤ってきました。しかし神の前に今彼が知ったのは、その墮落と悪、罪と汚れとは自分そのものだ、ということでした。とりわけ彼は、自分の口がどれほど人を傷つけてきたかを痛切に感じました。自分の唇と共に自分は死ぬ。彼はうめきました。

「オーイ……」

「災いだ（オーイ）。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の

民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」六・五

「するとセラフィムのひとり、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。『見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。』」六・六―七

祭壇に燃える炭火、神の火が彼の唇に触れました。神の火がイザヤの唇を焼いたのです。唇と共にイザヤの魂が焼かれた。焼いて清められた。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

彼は罪の赦しを受けました。神の燃える火は審き滅ぼす火です。しかしその火は神の燃える愛の火であるがゆえに、彼を清め赦す火であったのです。

この時、彼は主の声を聞きました。

「『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』」六・八

「我々……」というのは、神が天使を集

めて会議を開いておられる情景を示しています。

「わたしは言った。『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。』」

主は言われた。『行け、この民に言うがよい、よく聞け、しかし理解するな、よく見よ、しかし悟るな、と。』」六・八―九

こうして神はイザヤを、ご自分の言葉を伝える器、預言者とされたのです。

「よく聞け、しかし理解するな」というのは、多くの人々がイザヤの告げる言葉に耳を傾けないことを覚悟せよ、という意味が含まれています。

三 「インマヌエル」

——主が与えられるしるし



やがてイザヤは結婚し、子どもが生まれました。その子の名前は神から示されたものでしょう。「シエアル・ヤシュブ」と名付けました。その意味は「残りの者は帰るであろう」です。

戦争が始まりました。イザヤの国はユダ

王国です。エルサレムが首都です。北どりの国はイスラエル王国、首都はサマリヤです。ダビデ、ソロモンの時代は一つだったのですが、ソロモンの死後、南北に分裂したのです。その北王国イスラエルが南ユダ王国に攻め込んで来たのです。しかも北イスラエルはアラム王国と同盟したという知らせが伝えられました。

イスラエルとアラムが同盟したという知らせ聞いて、ユダの王と人々の心は動揺しました。「森の木々が風に揺れ動くように動揺した」と書いてあります（七・二）。当時のユダの王はアハズといいました。

その時、神はイザヤに命じて言われました。「あなたの息子シエアル・ヤシュブを連れてアハズに会いに行きなさい」。

首都エルサレムが敵に包囲される恐れがある。水を確保しなければなりません。アハズ王は地下を通ってエルサレムに流れ込む水路の視察に出かけていました。シロアムの池の近くです。そこに行つてアハズにわたしの言葉を告げるように、と主はイザヤに言われたのです。

イザヤは神に言われたとおりに息子を連

れて行きました。まだ三歳か四歳の幼児です。なぜこんな小さい子どもを連れて行くように言われたのでしょうか。

イザヤはアハズ王に会って主の言葉を告げて言いました。

「あなたは恐れてはならない。イスラエルの王もアラムの王も燃え残りのくすぶる切り株のようなものだ。今こそ神に立ち帰りなさい。神こそがこの国を守られる。落ち着いて、神を信じなさい」。

ここで息子シエアル・ヤシュブを連れて行った意味が明らかになります。シエアル・ヤシュブとは「残りの者は帰るであろう」という意味です。「たとえ多くの人々が神から離れて行っても、残りの者は神に帰って来るであろう。あなたは神の民ユダの王として、あなたこそその残りの者となって神のもとに帰りなさい。それが唯一の救いの道だ」。

幼い息子シエアル・ヤシュブは何も語りませんが、その名前が、その存在が、神の招き、神の呼びかけであったのです。

しかしアハズ王は聞こうとしません。そこで主はイザヤを通してアハズに言われま

した。「信じられないというのならしるしを求めなさい。神が確かに生きておられることをあらわすしるしをあなたに示そう」。けれどもアハズは「わたしはしるしを求めない。主を試すようなことはしない」と言いました。

一般に神のしるしを求めるのは信仰上誤ったこととされます。しかしぎりぎりの場合に、神が生きておられることを示すしるしを与えることがあるのです。今、神はこのアハズを何としてもご自分のもとに引き寄せようとされた。信じられないなら、信じて平安を得るために、神ご自身がしるしを与えようとされたのです。ところがアハズはそれを拒みました。信仰的な口ぶりによって、神の招きを拒否したのです。

イザヤは激しく落胆し失望しました。これほど神が激しく呼びかけておられるのに受け入れようとしないのか。しかしその時イザヤの口をついて出たのは、にもかかわらず神ご自身がしるしを与えられる、という言葉でした。

「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おと

めが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」七・一四

おとめが身ごもって男の子を産む。その名をインマヌエルと呼ぶ。やがて生まれるその子が、インマヌエル、「神が私たちと共におられる」というしるしとなる、というのです。

これは七百数十年を経て実現します。ヨセフが夢の中で天使から聞いたのはこの言葉でした。おとめマリアから生まれるその子イエスさまこそ、神が生きておられるという事実をあらわすしるし、神が私たちと共におられるというしるしです。

四 「この民の行く道を行かないように」——軍事同盟への否

アハズ王はイザヤを通して語られた主の言葉を聞かず、戦争の準備をするばかりでした。しかしこの戦争はしてはいけない、それは神の御心に反する、というのがイザヤの確信でした。やがてイザヤに二人目の子どもが生まれます。二人目の子どもにも神が名前を与えられました。「マヘル・シ



ヤラル・ハシュ・バズ」という名前です。意味は「分捕りは早く、略奪は速やかに来る」です。戦争によって生じる事態を予告する名前でした。

北イスラエルとアラムの同盟に対して、アハズ王はエジプトと同盟して対抗しようとしてしました。アハズ王とユダの国の人々は雪崩を打って戦争の準備を進めていきます。そこにあるのは恐怖です。恐怖を武力によって静めようとするあせりです。イザヤは言います。

「諸国の民よ、連合せよ、だがおののけ。遠い国々よ、共に耳を傾けよ。武装せよ、だが、おののけ。武装せよ、だが、おののけ。戦略を練るがよい、だが、挫折する。決定するがよい、だが、実現することはない。神が我らと共にられる（イシマヌエル）のだから。」ハ・九―一〇

しかし王も人々も耳を貸そうとせず、戦争への道を突き進みます。「神を信じて静かにしていなさい」というのはただの理想論に過ぎないのでしょうか。イザヤは無力を感じました。自分の言葉も働きも空しいものなのか。時の勢い、世の中の流れに抵

抗してもむだなのか。

しかしこの時、神がイザヤを捕らえて言われました。

「主は御手をもってわたしをとらえ、この民の行く道を行かないように戒めて言われた。あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを何一つ同盟と呼んではならない。彼らが恐れるものを、恐れてはならない。その前におののいてはならない。万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。」ハ・一一―一三

神ご自身が御手をもってイザヤを捕らえて言われた、ということです。「この民の行く道を行ってはならない」。「あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを何一つ同盟と呼んではならない」。神と同盟せず一体何が同盟か。

戦争準備へとあおり、あおられて行くのは、本当に畏るべき方を知らないからです。

「万軍の主をのみ、聖なる方とせよ」。

もしこの時、神ご自身がイザヤを捕らえくださなければ、イザヤは失望のあまり世の中に妥協したか、それとも嘆きのあま

り憤死したかだったでしょう。しかし神が彼を捕らえてくださったので、彼は自分を保ち、短期決戦を考えず長期的展望を持つようになりました。

「わたしは弟子たちと共に、証しの書を守り、教えを封じておこう。わたしは主を待ち望む。主は御顔をヤコブの家に隠しておられるが、なおわたしは、彼に望みをかける。見よ、わたしと、主がわたしにゆだねられた子らは、シオンの山に住まわれる万軍の主が与えられたイスラエルのしるしと奇跡である。」ハ・一六―一八

今はこうであっても、必ず神の言葉が聞かれる時が来る。その時に備えて神の言葉を堅く保つていよう。イザヤは、自分と妻に与えられた二人の子どもたちの存在をかげがえないものと感じました。シエアル・ヤシユブとマヘル・シヤラル・ハシュ・バズ。この二人の子どもたちは、神が生きておられこのしるしである。目に映るのは神に背いて戦争へと走る姿ばかり。しかしこの子らは、神が生きておられることを示す目に見えるしるしだ。イザヤは妻と共

に、深い慰めを受けたことでしょう。

五 「平和の君」——主の熱意



現実のユダ王国の社会は暗黒でした。軍費の増大の中で、貧しい人々はさらに貧しくされ、孤児ややもめはいっそう厳しい状況に置かれました。この国は間違っている、と叫んできた預言者の声は聞かれません。しかしこの闇の中にイザヤは大きな光を見ました。幻といってもよいのかもしれませんが。言い換えればビジョンです。現実

は闇であつても、その向こうには光がある、可能性がある、神が用意していただく新しい歴史がある。その可能性に自分を賭けてイザヤは生きていきます。

信仰は現実を見つめるとともに、現実を越える神の可能性を見えるのです。

「闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。あなたは深い喜びと大きな楽しみをお与えになり人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように、戦利品を分け合つて楽しむように。彼らの負う軛、肩を

打つ杖、虐げる者の鞭を、あなたはミデアンの日のように折つてくださった。地を踏み鳴らした兵士の靴、血にまみれた軍服はことごとく、火に投げ込まれ、焼き尽くされた。

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によつて、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」九・一一六

神が幻を、やがて実現するビジョンを示してください。イザヤが見たのは、神の光のもとで新しい歴史が始まる、ということです。戦争のための軍装、軍備は火に投げ込まれる。わたしたちのために生まれるひとりの男の子が、平和を実現されるのです。

「その名は、『驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君』と唱えられる。」

平和、正義、恵みの業——これらが新しい時代のキーワードです。平和と正義と恵みの業を行おう。「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」。神の熱意が平和を実現させる。

「わたしは熱情の神である」——これがかつてモーセとイスラエルの民がシナイ山で聞いた神の自己宣言です（出エジプト記二〇・五）。熱情の神。神は人とこの世界を救おうとする情熱を持っておられる。神の情熱は人に伝染する。神の情熱に触れた者は、自分も情熱を燃やして神に仕える者となる。そのひとりがイザヤでした。平和を実現しようとされる神の情熱。これに触れた者も、平和の実現に向かって生きることになるのです。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。……その名は、『平和の君』と唱えられる」。

イザヤがその到来を告げた救い主イエス・キリスト。この方は「平和の君」として、平和の実現の働きに加わるようにと私たちを招いておられます。

六 「靈が高い天から注がれる」—— 平和への神の情熱と靈の注ぎ

イザヤの預言者としての召命を語る第六章から七、八、九章までの概略を追ってききました。ここでイザヤが告げた「神の靈の注ぎ」ということについて触れておきます。今、神の熱意、神の情熱ということを示しましたけれども、これはそういうこともあるか、という程度です。まずことではありません。神が願われるのは、神の情熱が人の中に燃える現実となる、ということです。神の情熱が人の現実となる。そのために神がなさることがあります。それは「ご自分の靈を人に注ぐ」ということです。イザヤは神の言葉と靈を受けて次のように語りました。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち
その上に主の靈がとどまる。

知恵と識別の靈、思慮と勇氣の靈、主を知り、畏れ敬う靈。

彼は主を畏れ敬う靈に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず、耳

にするとところによって弁護することはない。

弱い人のために正当な裁きを行い、この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち、唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。

正義をその腰の帯とし、眞実をその身に帯びる。」——一・一五

主の靈を受けた人。その人が弱い人のために正当な裁きを行い、貧しい人々を公平に弁護する。「新共同訳」には「平和の王」という見出しが付けられています。この人とはだれか。それはイエス・キリストのことです。主イエスは洗礼において神の靈を受けられた。神の靈が主イエスの中で働き、主イエスをとおして働いていた。

しかしそれだけではありません。主イエスに注がれ、イエスを生かしていた靈は、私たちにも注がれるのです。

「知恵と識別の靈、思慮と勇氣の靈、主を知り、畏れ敬う靈」。

これは堅信式の式文の言葉です。主教の按手を通して私たちに注がれるのは神の靈、主イエスの靈です。神の情熱を受け、神の

願われるごとくに生きて行けるように、神の靈を受けて力づけられる。これが洗礼であり、堅信です。

もう一つ、神の靈の注ぎの約束を聞きましょう。

「ついに、我々の上に、靈が高い天から注がれる。荒れ野は園となり、園は森と見なされる。そのとき、荒れ野に公平が宿り、園に正義が住まう。

正義が造り出すものは平和であり、正義が生み出すものは、とこしえに安らかな信頼である。

わが民は平和の住みか、安らかな宿、憂いなき休息の場所に住まう。」——三二・一五——一八

七 「彼らを聖なる者としてくださ
い」——主イエスの祈り

ところで、イザヤに出会い、イザヤを通して語られたのは「聖なる神」でした。エルサレムの神殿でイザヤが聞いたのは、セラファイムの合唱でした。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主

の栄光は、地をすべて覆う。」六・三

聖なる神に直面してイザヤは自分の汚れを知り、死を覚悟しました。その彼を聖なる神が火で焼き清められました。

イザヤが出会った「聖なる神」とは何か。

第一に、この世界と人の罪の姿を照らし出す神です。私たちの汚れが照らし出されるとき、私たちは場合によっては死ぬ経験をさせられる。

第二に、しかし聖なる神は清める神、赦す神です。聖なる神は愛が燃える神であるがゆえに、私たちを放置せず、私たちを清め、赦すのです。それがイザヤが経験したことでした。

第三に、聖なる神は人をこの世界に派遣する神です。弱い人、貧しい人々を虐げるこの社会、戦争に向かって走るこの世界に私たちを派遣する。平和と正義が実現するために、私たちを、ご自身の霊によって力づけて送り出されるのが聖なる神です。

これは、新約聖書でイエス・キリストによつてあらわされた神と同じ神です。ペテロはイエスとの出会いにおいて自分の罪を痛切に知りました（ルカ五・八）。しかし

イエスは最後の晩餐においてペテロの汚れた足を洗われました。そうして彼はイエスから清めと赦しを受けたのです。そしてやがて彼は宣教のために派遣されました。

ヨハネによる福音書によれば、最後の晩餐において主イエスは弟子たちのために祈られました。語るだけのことを語った後は祈るしかなかったのです。

「わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってさげられた者となるためです。」ヨハネ一七・一五—一九

神が聖なる神だ、というだけではありません。「真理によって、彼らを聖なる者としてください」。これがイエスの弟子たちのための祈りでした。

聖なる神に属し、私たちも聖なる者とされる。それは、神の赦しと清めを受けて、この世界に派遣されるということです。

かつてイザヤに起こったことが、今弟子たちにも起こるように、かつてイザヤを通して語り働かれた神が、私たちを通して語り働かれるように——それがイエスの祈りでした。

主イエスが祈っていただく。最初の弟子たちのためではなく、今の弟子たちである私たちのために祈っていただく。その祈りに支えられて、私たちも主とともに神さまの働きを担っていくのです。

○日本が戦争「できる」国から「する」国へと変貌する中、平和の使信を共有することを願い、講演を一举に掲載しました。
○ホームページを開設しました。音楽、聖書の話、韓国の詩など掲載しています。
<http://www002.upp.so-net.ne.jp/izaya/>

『アリエル』一六六号（復刊第二二号）
二〇〇四年八月発行。郵便振替口座〇〇九一〇〇〇—一六〇五六八「井田 泉」
E-mail izaya@da2.so-net.ne.jp